

のみであるが、キアシドクガでは receptaculum seminis 中に於ける eupyrene spermatozoa の運動が見られ、クロタイマイでは eupyrene, apyrene spermatozoa 共に運動するのが見られない。鱗翅類の精子の移行、並びに授精の機構上研究を要すべき興味ある問題である。

カヒヤドリウミグモに於ける珍しい異常肢の 1 例

大 島 廣 HIROSHI OOSHIMA (福岡)

故有田敬三君が遺したアサリノカヒヤドリウミグモ *Nymphonella tapetis* の標本の中に頗る珍奇な畸形があつた。之はアサリの外套腔を辭して自由生活を始める迄には尙相當遠い幼生であるが、胴部の後半に於ける體節の區劃が甚だ不規則となり、正常ならば 4 對あるべき歩脚が 3 對しか無く、しかも右側最後のものは 2 回も分岐して 3 本の枝に終つて居るのである。腹髓を構成する神経節の配置も不規則で、左側の第三・第四神経節から派出する神経は相近づいて共に第二の歩脚に進入し、右側では第四・第五神経節から出た神経が一緒になつて第三歩脚に入り込んでゐる。消化管についても亦、2 條の腸盲管が途中合一起して左側第二歩脚に入つて居るのが見られる。

斯くの如く、この個體に於ける歩脚数の不足はある肢が缺如した結果と見るべきでなく、明かに、本來前後 2 本の肢として別々に發達すべきものの相合して 1 本と成つたものが各側に 1 組づつ在るのだと云ふことを知るべきである。なほ分岐した脚は他のものよりも太く、先端の部分は大きさも形も正常のものに比べて變りはないが、第二回の分岐によつて生じた 2 本は互に鏡像の位置をとつて居る。

最近大島 (1942) によつて報告された *Callipallene brevisstris* の六脚の個體の成因は、歩脚の最後端の 1 對が全然發現し得ずに終つたものと解釋されてあるが、この *Nymphonella* 屬にあつては歩脚の發現及び生長の經過が *Callipallene* その他に於けるそれと全然趣を異にしてゐると云ふ發生學上の事實から考へて、2 本の脚がその萌芽の時代に何等かの支障に因つて分派し損ひ、1 本の脚となつて了つたものと解釋する。但しそのやうな前後 2 本の脚の合着が、左側では第二・第三の歩脚の間に起り、右側に於いては第三・第四のもの間に起つたのは何故か？そして同じく重複性の肢でありながら、何故に前者は異常を示さず、後者のみ他よりも太さに於いて勝り、且つ 2 回の分岐によつて 3 本の先端に終るに至つたものか？之を満足に説明することは困難である。

これと極めてよく似た畸形の *Anoplodactylus petiolatus* の 1 標本が SCHIMKEWITSCH-DOGIEL 兩氏 (1913) によつて記載されてゐるが、この場合は體の後部が失はれ、再生の途中更に外傷を受け、そのため右側には歩脚が 3 本しか無く、左側最後のものが 2 回まで分岐して三叉狀になつたものと説明されて居る。余等の場合ではアサリの外套腔内に於ける安全な生活に、そのやうな激しい外傷を受ける機会があらうとは想像し得ないから、異常の原因はどうしても何か他に求めなければならぬと信ずる。

從來知られた少數の異常肢の例 (DOGIEL 1911; 有田 1936; 大島 1942) から綜合して考へるに、海蜘蛛類に於ける歩脚の異常は體の前方によりも後端に近く起り易いと云ふ傾向の存在を認めざるを得ないのである。

問 これは質問ではないが御参考になるかと思つて申し上げる。小生はカブトガニ胚子の一部分を殺して發生させる實驗に従事して居るが、かゝる場合には屢々體節の融合、またそれに伴つて 2 肢間の融合が起る。その際面白いことは融合した 2 肢の先端に屢々分岐が起ることである。そして出来た肢は丁度講演者が只今畸形として報告せられたるものそつくりとなる。(丘 英通)

答 それは誠に面白いと思ひます (大島 廣)